

海外だより

モンゴル国からの活動報告 「国際助産師の日」の国際会議等に参加して

池本めぐみ

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 助産師

はじめに

いつか国際看護に関わる仕事がしたいと思い続けて約20年、やっと現場の地にたどり着きました。ここは、モンゴル国のウランバートルです。独立行政法人国際協力機構（Japan International Cooperation Agency：JICA）の技術協力プロジェクト「医師及び看護師の卒後研修強化プロジェクト」の長期専門家として国立国際医療研究センター国際医療協力局から派遣されました。この度、本誌においてモンゴル国からの報告を連載するという貴重な機会をいただくことになりました。日本の助産師である私の目で見たこと、感じたこと、驚いたこと、時にはモンゴル国での生活面等について海外だよりとしてご報告をさせていただきたいと思います。なお、モンゴル国は、日本助産師会の先生方がかねてよりご支援され、モンゴル助産師会の創立ならびに助産師の知識・技術の向上等に深く寄与されておられる大切な国であると理解しています。

今回は、モンゴル国への赴任時の新型コロナウイルスによる影響、「国際助産師の日」にモンゴル助産師会等の開催による国際会議への参加、「国際看護師の日」のテレビ番組への出演についてご報告させていただきます。

1. モンゴル国への赴任時の新型コロナウイルスによる影響

当初の渡航予定は、プロジェクトの開始時期である2021年1月でした。新型コロナウイルスの影響などのために渡航が難しく、「まだ、日本にいたんだね」と冗談を交えて声をかけられるほどでしたが、4月中旬にモンゴル国の地を踏むことができました。4月は、モンゴル国内でも新型コロナウイルスの感

染者の増加がみられていた時期であり、検疫が強化されておりました。1週間の指定隔離施設での隔離に加え、1週間の自宅隔離の合計2週間の隔離を経験しました。以前は、指定隔離施設3週間、自宅隔離2週間の合計5週間の時期もあったので、私の渡航時は隔離期間が短縮されていたとも言えます。1週間の指定隔離施設では、毎日の検温と体調の確認、PCR検査も1週間のうちに2回受けました。食事は、1日に3回ドアの前に設置された小さいテーブルに置かれ、置いてくださった際のドアへのノックが、食事が届いた合図でした。お腹がすきすぎた時は、何度かドアののぞき穴から食事が届いていないか確認したこともあります。

隔離期間中は、ウランバートル市のロックダウン、新型コロナワクチン接種への取り組みのすごさを感じながら、私個人は、オンラインによるプロジェクト関連の会議への参加やプロジェクトの活動を準備しました。モンゴル国においても昨年度からさまざまなオンライン化が進んでおり、特にZoomを用いた会議、勉強会、学会等の実施が行われています。移動が制限されている地域の関係機関との会議等を実施することができ、今後も離れた地域や時間が限られる中、オンラインを活用し、さまざまな可能性が広がることを感じています。

また、今回の入国の際の隔離の目的などと違いますが、私は災害看護も専門としているので、「隔離」に関して感じていることをここで少し共有させていただきます。すでにご存じのことであると思いますが、感染症に対して公衆衛生や検疫として、隔離が必要な場合があります。これまで日本国内では、2009年の神戸での新型インフルエンザの際の高校生の隔離、2020年の横浜でのダイヤモンドプリンセス号での自室での隔離がありました。私が見聞

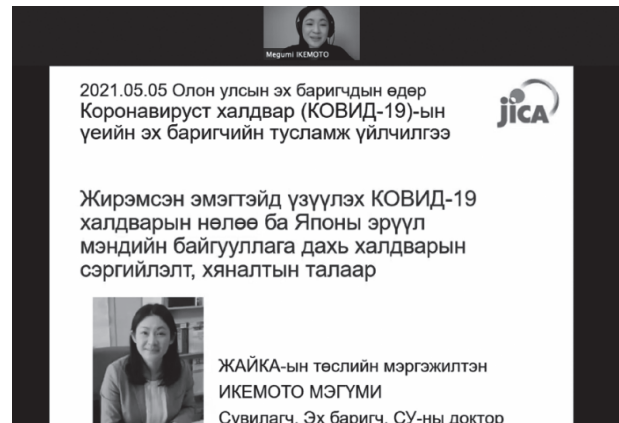
きし、感じたことがあります。未知の感染症への対応の初期段階は、情報が錯綜する上に人々の不安が大きく、不安に付随するさまざまな問題や課題があることは承知の通りだと思います。一方、感染症に対応する医療従事者をはじめとする関係者や隔離されている個人への状況が見えにくいと感じています。隔離されている方、個人の視点から見ると、自分がおかれている状況の説明や疑問への応答、メンタルヘルスへの配慮、食生活の変化や運動不足などによる影響など多くの課題があると思います。このような見えにくい多くの課題に関しても、丁寧に検討し、次の有事の際に活かせるようにあってほしいと感じています。

2. 「国際助産師の日」にモンゴル助産師会等が主催する国際会議への参加

国際助産師の日（毎年5月5日）は、助産師の業務の重要性を多くの人に知ってもらい、助産師の必要性に対する意識を高めることを目的に設置されています。1992年以降、5月5日には世界各地でその国の状況に合わせたイベントが実施されています。モンゴル国においても「国際助産師の日」のイベントを実施しており、今年が10回目です。2021年5月5日にモンゴル助産師会、モンゴル保健省、日本助産師会などにより「COVID-19下における助産ケア」というテーマのもと国際会議が開催されました。

国際会議では、モンゴル保健省等からのモンゴルの助産師の母子保健や新型コロナウイルスによる影響下での助産ケアの提供などの貢献が述べられました。また、妊産婦における新型コロナウイルスの対策に関する情報共有や研究が発表されました。その研究内容とは、ウランバートルや地方の病院で勤務する助産師による助産師の業務内容、新型コロナウイルスによるストレスやその影響、地方における分娩時の合併症、地方の助産師の定着や福利厚生について等でした。また、日本助産師会の島田会長からのお言葉が伝えられることをはじめに日本助産師会の先生方のご発表がありました。

私には、国立国際医療研究センターにおいて新型コロナウイルスの対応をしてきた立場で、また助産師という専門家として、日本の妊産婦における新型コロナウイルス対策に関する情報提供が依頼されました。日本の臨床の現場での妊婦における新型コロナ



(写真1) 国際会議の際の自己紹介をしている様子



(写真2) 個人防護具の着脱とその注意点を説明

ウイルスへの対応、新型コロナワクチン接種などの情報を提供することができました。また、発表や質疑応答を通して、国や文化が異なっても、妊婦に寄り添う助産師としての想いは同じであることを共有することができました。

3. 「国際看護師の日」のテレビ番組への出演

国際看護師の日（毎年5月12日）は、看護師の社会への貢献を称える目的で1995年に設置された国際デーです。この日は、近代看護教育の母とも言われるナイチンゲールの誕生日であり、世界中の看護師にとって大切な日です。モンゴル看護協会とモンゴル保健省は、この国際看護師の日にすべての看護師への感謝の意を込めて、生放送の番組を計画しました。看護人材の育成に関わる「医師及び看護師の卒業研修強化プロジェクト」に番組への出演要請をいただいたので、出演し、コメントさせていただきました。

モンゴルの看護師は、新型コロナウイルスに対応する場合、一定の隔離期間があり、どんなに小さな子どもがいても、家族と離れ働いています。モンゴル国内では、新型コロナウイルスの感染への対応をする看護師の姿を通して、非常時だけでなく、平時からの看護の役割やその重要性が再確認されています。

番組では、モンゴルの医療を支えている看護師たちの貢献に対する感謝の気持ちを込めた大統領からのメッセージや保健大臣の挨拶がありました。また、モンゴル看護協会からモンゴルの看護師が抱える課題を解決するための保健大臣への要望書の内容が発表され、保健大臣に手渡されました。要望書には、看護師が安全に働ける環境の整備、パワーハラスメントの防止、勤務時間、新型コロナウイルスの対応のためにレッドゾーンで働く看護師のメンタルサポート等があり、生放送でモンゴル全土に放送されました。

私は、プロジェクトがモンゴルの保健省や看護関係者とともに2019年に新人看護師の育成するための指導者養成研修を開発し、実施したこと、今後も新人看護師の教育等に関わっていくことを共有しました。



(写真3) 国際看護師の日のテレビ番組での様子

おわりに

このようにご報告させていただく機会をいただきましたこと、モンゴル国への派遣をしていただいたことなど、日本助産師会の先生方をはじめ、すべての関係者の方に深く感謝申し上げます。今後、新型コロナウイルスの状況に合わせてながら活動を本格化させていきたいと思っております。引き続き、ご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。